

平城京の発掘調査

本年度の発掘調査は25件に上る。内訳は宮城内10件、京城内14件である。このうち、学術研究および史跡整備に関わる発掘調査は9件4,918m²、住宅建設等による緊急調査は15件3,068m²である。本年度は庭園遺構の発掘が多かったことが特徴である。

平城宮内の調査については、東院の南の二条条間路北側溝の調査（第301次）では、堀地部分で底のつく大型の掘立柱建物、東院南門の前面では敷石を施し石で護岸した側溝と大型の橋をそれぞれ検出した。これらは東院あるいは楊梅宮の造営に伴い南門周辺の整備が進んだものと解される。また、東院庭園内の北西部（第302次）では、曲水宴に用いたと考えられる蛇行溝を27m程検出し、玉石敷きの小池が流れの一部にあることがわかった。これは流れの途中で水を貯める施設であり、流杯渠の意匠や構造を考える上で重要な発見である。

第一次大極殿院地区では、塼積擁壁西端から西面築地回廊部分の調査（第305次）を行い、この部分の地盤は2mを越える盛土造成をしていることがわかった。また、塼積みが5段程残存しており、塼の積み方の実態が明らかになった。さらに西宮の時期の暗渠からは「近衛府一」と墨書された須恵器が見つかり、禁中の警備に関する資料となった。大極殿院内では復原整備での正確を期すために、大極殿（第311次）や北面回廊（次数なし）の一部の再発掘を行い、位置や規模を確定した。

次に平城京城については、興福寺で中金堂と中門を結ぶ回廊の北西部で境内整備事業に伴う調査（第308次）を実施し、東面および北面回廊や中金堂前面の石敷き等に加え、春日曼荼羅などで回廊に接して描かれる儀式用仮設建物を実際に検出した。出土遺物では、奈良時代の緑釉水波文塼、桃山時代の金箔瓦などが注目される。

都市計画道路建設に伴う西隆寺の調査（第306・309次）では、金堂前で灯籠の根石、寺造営前の西二坊坊間西小路両側溝等を検出した。

庭園整備事業に伴う旧大乘院庭園の調査（第310次）では、『大乘院四季真景図』等に描かれた西小池の東岸を検出し、西小池がJR西日本の保養施設の下まで広がっていることを確認した。

東院庭園のすぐ東に位置する法華寺阿弥陀浄土院は、水田の中に大きな立石があることから、庭園があることは推測されていたが、トレンチ調査（第312次）により複雑な汀線をもち底に石を敷く池、景石を伴う岬や中島、池の中に建つ建物遺構を検出した。この様相は浄土変相図を想起させ、現存する浄土庭園の遺構で最も古い平等院庭園の造営から三百年遡る、浄土庭園の嚆矢と位置付けることができよう。出土遺物には、宝相華文を透かし彫りにした垂木先金物などがある。

左京三条二坊二坪では、長屋王邸の南西隅にあたる場所ので洲浜の園池を検出し（第303-8次）、邸宅内に複数の園池があったことが明らかになった。

左京三条一坊十坪の西半部で行った調査（第304次）では、坪の東西心と東一坊坊間路東側溝心の中軸線上に規模の大きい建物2棟が並ぶことがわかり、坪を東西に二等分する敷地割であったことが想定された。

なお、現地説明会を下記の通り実施した。

（内田和伸／平城宮跡発掘調査部）

5月29日	第301次（二条条間路北側溝）	石橋茂登
9月26日	第305次（第一次大極殿院）	高橋克壽
12月4日	第308次（興福寺中金堂院回廊）	箱崎和久
3月4日	第310次（旧大乘院庭園）	金田明大
4月15日	第312次（法華寺阿弥陀浄土院）	清野孝之

建造物の調査と研究

古代建築の調査研究 従来から継続している本研究では、昨年度から所内の共同研究として、これまでに蓄積された調査研究、発掘された建築部材、保存修理工事で得たデータ、現存古代建築の観察などをもとに、細部にわたる古代建築の技法の総合的な研究を行っている。当年度は基壇の外装、屋根葺き仕様、彩色などについて調査した（57頁参照）。

基壇については、形態、石材の大きさや組み方、床の敷き方などの詳細を、事例や遺構によって検討するとともに、石材産地の現地調査を行った。瓦葺きは、実大模型を使って試し葺きを行い、軒隅・大棟・鴟尾・けらば・降棟・隅棟など各部の屋根葺き仕様と納まりを考察した。彩色は、事例を調査するとともに、とくに大極殿について、彩色の有無、程度、デザインなどの検討を始めた。今後さらに飾り金具の素材・加工・仕上げ・意匠、

土壁の構造・材料構成・仕様などについても、研究をすすめる予定である。

平城宮建物復原実施にともなう調査研究 大極殿関係では、復原実施設計図書作成、並びに5分の1構造模型と屋根葺き実験用の原寸瓦葺き模型の製作(61頁参照)について、また宮内省では築地の復原など、設計に関する監修を行った。東院庭園隅櫓の施工にあたっては、原寸図における検討や用材の確認を行った。

木造建造物の保存修復のための調査研究 昨年度から7年計画で発足した4部会からなるプロジェクトで、文化庁の協力による関係機関や大学との共同研究として行っている。部会1は保存修復の体制確立のための研究とし、多様化する文化財建造物に対処する新たな体制と組織の研究。部会2は保存修復に関する考え方と手法の研究として、過去の修復を評価するとともに、文化財保存修復の今後のあるべき考え方、方法をさぐる。部会3は参考となる海外の事例を調査研究する。部会4は保存事業にともない蓄積された学術資料の整理と保存活用方法の研究で、文化庁ほかに収蔵された保存修復時の資料を再評価し、今後の活用方法を研究するものである。

各地の史跡の整備事業への助言・指導 柳之御所(岩手県)、下野国分寺(国分寺町)、新居関(新居町)、崇廣堂(上野市)、近江国庁(滋賀県)、春日大社、津山城(津山市)、上淀庵寺等(淀江町)などの、遺跡整備における建物復原に関する助言・指導を行った。

各地の文化財建造物の修復事業への助言・指導 新宿御苑(環境庁)、中央公会堂(大阪市)、布引ダム(神戸市)、今井町(樫原市)、周防国分寺金堂(国分寺)、旧県会議事堂(山口県)、脇町南町(脇町)、西田橋(鹿児島県)などの保存修復にあたり、助言・指導を行った。

(木村 勉/建造物研究室)

書跡資料の調査と研究

研究所所蔵の北浦定政関係資料につき、資料管理、活用の意味から必要であるために、目録番号順に写真撮影を行った。また一部資料の釈読を開始した。

寺社所蔵資料調査関係では、興福寺で、『興福寺典籍文書目録 第三巻』に収録予定の分につき、大部な大般若経箱を除いては調査作成は終了した。なお写真撮影を

継続して行っている。またそれに併行して、目録原稿作成をしている。薬師寺は、東京大学史料編纂所と共同で調査しているが、木箱28箱のうち、第26、27函を除いて調査作成を終えた。次には、冊子本が大半を占める筆筒分、整理用紙箱分に取りかかることになる。内容については、調査研究報告の欄を参照されたい。

法隆寺では、天函、リ函の未撮影分につき、写真撮影をした。これで法隆寺文書の片仮名箱(卷子本)と甲乙等箱(冊子本)についてはすべて撮影したことになる。また寺側で行っている、まだ目録化されていない文書の調査に関係して、中世分の整理に協力をした。また『昭和資財帳』収録の目録記載の中世文書につき釈文を作成中である。

さらに東大寺図書館には、多くは江戸時代のものであるが、中世文書もかなり含む100箱以上の文書記録類が所蔵されている。それらの資料につき、整理、調査を計画しており、函号をつける作業を行った。

その他文化庁関係調査で醍醐寺聖教、冷泉家典籍、科研関係調査で西大寺絵図・文書、仁和寺御経蔵聖教、他機関調査に参加するかたちで春日大社記録、寺からの調査協力依頼で石山寺知足庵聖教の調査に参加した。

また奈良県教委が実施している県下所在の中国朝鮮版経調査にも参加している。なお版経で既指定の一切経など大部なものには、詳細な目録が作成されていないこともあり、改めて詳しい資料のデータを収集する必要性が感じられた。

書跡資料料紙原本の調査研究関係では、反故紙を利用して、いろいろな製法によって宿紙のサンプルを製作した。反故紙のみを漉き返すだけでは、現存する宿紙までの濃さには到底ならないので、相当量の墨汁を加えたり、柿渋で定着性を強めることなどの加工が行われたであろうことが共通認識となった。

(綾村 宏/歴史研究室)

埋蔵文化財センターの研究活動

1部6研究室、情報資料室と教務室からなる。部・研究室・各研究員がそれぞれの課題を定めて取り組んでいる研究はいうまでもなく、外部への埋蔵文化財の調査や保存についての研修を開催し、また各地で行われる発掘調査や保存事業について、地方公共団体や関係機関の求